



電腦博士Mr.HIROSEの

ITごぼれ話

第15回

「オープンソースのお話」後編

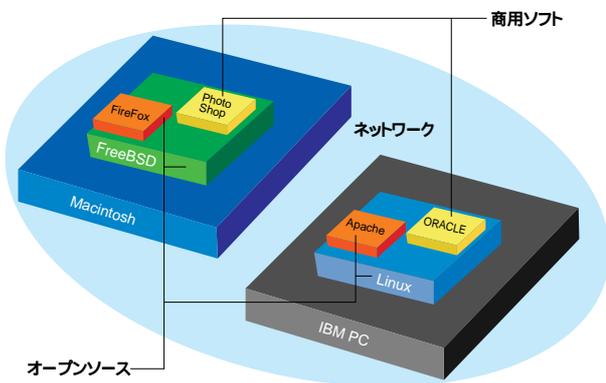
ITプランナー 廣瀬隆夫

今回は、オープンソースの世界では企業秘密のソースコードを、なぜ公開できるのか、商用ソフトと遜色ないワープロソフトが、なぜ無料で自由に使えるのか、ということをご説明いたしました。今回は、もう少し、具体的にオープンソースについて、お話をしたいと思います。

オープンソースとビジネス

オープンソースで作られたソフトは無料で使えて、パソコンを使う側にとっては、大歓迎ですが、無料のオープンソースが普及してしまうと、パソコンのOSや商用ソフトのビジネスに影響が出ないのでしょうか。実は、IBM、アップル、SUN、オラクル、ノベルなどのパソコン業界の老舗は、ほとんど、オープンソースをビジネスに取り込んで成功しています。どのようにオープンソースを利用しているのでしょうか。

図1 オープンソースとビジネス



ソフトウェア開発のコストの削減

自社開発で膨大なコストがかかっていたプロジェクトをオープンソースにすることで開発コストの大幅な削減ができます。成果物はソースコードが公開されて

独占は出来なくなりますが自社のサーバの拡販や運用管理というサービスをビジネスに出来るのです。現在、IBMが製造する全てのコンピュータでLinuxが稼働しています。今までの独自のOSにかかっていた維持管理コストが大幅に削減できただけでなく、Linuxの採用でユーザ層が広がりIBMブランドのサーバの売上が大きく伸びました。しかも、オープンソースの採用で独占禁止法への抵触も回避できています。

自社の主力ソフトの拡販に利用

ソフトウェア稼働基盤としてLinuxなどのオープンソースを採用し、自社の商用ソフトの拡販に活用するというビジネスです。ユーザは高価なWindowsのライセンスを払う必要がないので、システム構築の費用の節約ができます。オラクルは「MIRACLE LINUX」というオープンソースのOSを無料で提供し、主力製品のデータベースソフト「ORACLE」の拡販に利用しています。アップルは、MacOS Xのコア部分にUnixの流れをくむFreeBSDというオープンソースを採用しています。オープンソースの採用でシステムの安定性が大幅に向上しました。

オープンソースのサポートをビジネスにする

オープンソースは、技術者が作っていますので、プログラム自体の性能は優れていてもマニュアルやインストール方法が整備されていない場合があります。ここに目をつけて、オープンソースソフトに使いやすいインストーラを付加したり、コールセンターで導入の支援や運用をサポートするビジネスが新しく生まれています。RedHat LinuxやTurbo Linuxなどはディストリビューションと呼ばれ、商用ソフトと同じようにパッケージされて、日本語のマニュアル付きでパソコンショップなどで売られています。

情報家電への組み込み

最近、携帯電話やDVDレコーダ、薄型液晶テレビなどの家電製品にオープンソースのLinuxが採用されています。組み込み型のLinuxは、プログラムのサイズが小さく、ライセンス料が必要ないので、製造コストを大幅に節約することが出来ます。日本の家電メーカーは積極的にオープンソースを採用することで、国のu-Japan戦略の要でもある情報家電の分野で主導権を握ろうと考えています。

オープンソースに対する誤解

このように、良い事だらけのオープンソースですが、無料というだけで採用すると大きなしっぺ返しを受けることがあります。次に、良くあるオープンソースに対する誤解を解説しておきます。

図2 オープンソースに対する誤解



著作権が存在すること

無料のソフトにはパブリックドメインソフトウェアという著作権を放棄したものもありますが、オープンソースには著作権が存在します。ライセンスに従ってしっかり著作権表示を行う必要があります。また、著作権保有者が「今日からライセンス料を徴収する」という可能性が無いとは言えません。

オープンソース = 無償という誤解

特に会社の業務システムにオープンソースを採用するようになるときに注意が必要です。オープンソースだから安上がり出来るだろうと思って採用したのに、運用管理やサポートに時間とコストがかかって、結局、従来のパッケージ製品を買った方が安かった、

ということも考えられます。オープンソースでも運用管理やシステム構築にはお金がかかります。

オープンソースはセキュリティに弱い？

ソースが公開されていますので、悪意のある者によるセキュリティホールへの攻撃を受けやすいのではないかと心配する人がいます。しかし、逆にソースが公開されているので修復が早いとも考えられます。実際に致命的なセキュリティホールは、短時間で修復されることが多く、ブラウザなどのインターネット関連のソフトは、商用ソフトより安全であると言われています。

オープンソースは自己責任

インターネットに公開されているオープンソースをダウンロードしてウイルスに侵されたり、パソコンの調子がおかしくなったりしても、誰も助けてくれません。オープンソースを使う場合は、自分で問題解決できる最低限の技術を習得するか、技術に詳しい人のサポートが受けられるコネクションを持っている必要があります。インストールして思うような結果が出なくても、ソフトの作者にクレームを付けることはできません。

どんなオープンソースがあるのか？

LinuxやFreeBSDの他に、現在、世の中に普及している代表的なオープンソースをご紹介します。本屋さんのパソコン書籍コーナーには様々なオープンソースの解説本が売られており、様々な分野に、かなり普及しています。特にインターネット関連のシステムでは、オープンソースのソフトを使わないと構築が難しい状況になりつつあります。大学でも盛んにオープンソースが教育に使われ、新しいソフトが次々と開発されています。

ブラウザ「Firefox」

Firefoxは、Netscapeから派生したMozillaというオープンソースプロジェクトが開発したWebブラウザです。商用のIEに比べてセキュリティホールが少ない、使いやすいという理由で、全世界で累計8000万



のダウンロードの実績があります。Mozillaの語源は、ブラウザの元祖のMosaicとGozilla（日本映画のゴジラ）を合成したもので、インターネットの世界に現れた怪獣という意味です。（<http://www.mozilla-japan.org/>）

オフィス製品「OpenOffice」

OpenOfficeはMicrosoft Officeとの高い互換性を持ったオープンソースのオフィス製品です。欧米ではかなり普及しています。日本語版も用意されていてLinuxだけでなく、Windows版やMacOS版も出ています。画面デザインやマニュアルの完成度はMicrosoft Officeには及びませんが、機能的には十分に実用段階に入っています。（<http://ja.openoffice.org/>）

Webサーバ「Apache」

インターネットの代名詞とも言えるWebサーバ構築用のソフトです。ApacheはLinuxやFreeBSDなどのUnix系OSやWindows、MacOSなど、ほとんどのプラットフォームで動作します。全世界で稼働しているWebサーバの約7割がApacheであると言われていいます。ソフトの修正を意味するパッチとインディアンのアパッチをかけたネーミングで、IBMが巨額の資金援助をして普及に力を入れています。

スクリプト言語「Perl」

Perlは、現在、Webサーバで最もメジャーなスクリプト言語です。Perlはテキストファイルを検索、操作、整形、印刷する目的で開発されました。その後、ネットワークやシステムの管理ツールとして進化し、Webアプリケーションを構築するためのプログラミング言語として地位を確立しています。世の中に存在する、ほとんどのWebサーバの構築に使われていて、この言語の解説本もたくさん出ています。

オープン百科事典「Wikipedia」

ウィキペディアは、GNU フリー文書利用許諾契約書（GFDL）に基づいて、オープンソースと同じ方式で作成されている百科事典です。2001年にアメリカで始まったプロジェクトですが、今では、様々な言語に翻訳されて世界中に広まっています。執筆、編集は、参加者の共同作業によって行われており、文

書を複製したり、自由にコピーや配布をすることができます。（<http://ja.wikipedia.org/>）

オープンソースと林檎の話

最後に、オープンソースの理解を深めるために分かりやすい寓話を一つご紹介します。

昔々、林檎という果物を誰も知らない村がありました。ある時、二人の兄弟が山に遊びに行きました。二人は偶然、野生の林檎の木を見つけました。始めて口にした林檎は、今まで食べたことのない甘酸っぱい味がしました。二人の兄弟は、小さな林檎の木を1本ずつ家に持ち帰って育てることにしました。

兄は林檎の木の周りに厳重な柵を作って、村人の立ち入りを禁止して一人で育てました。肥料をたっぷり与えて丹精して育てた甲斐があって、何年かすると大きな美味しい林檎の実が沢山なりました。兄は、その林檎を村人たちに売ると、すぐに大評判になり、大儲けをしました。

弟は、道端に林檎の木を植えました。他に仕事を持っていましたので、兄のような手厚い世話は出来ませんでした。林檎が好きな弟は、時間の合間を見て、一生懸命育てました。実がなるまでに時間は、かかりましたが、それなりに美味しい林檎がなりました。

しばらくすると、木の周りには小さな林檎の木が生えてきました。弟は、近所の人たちと一緒に育てたら、もっと楽しいと思い、みんなに林檎の木を分けることにしました。林檎の木のそばには、次のような立て札を立てました。

この木は「オープン林檎」と呼んでください。
どなたでも、ご自由にお持ちいただいて結構です。
しかし、この林檎の木は他の人にも分けてください。
決して独り占めしないで下さい。
それから、林檎の木の近くには、
これと同じ立て札を立ててください。

何年かすると、弟が分けた「オープン林檎」の木は色々な所に植えられました。それぞれの木には、弟の林檎の木と同じ立て札が立ててありました。ご近所同士で林檎の木の育て方を教えあったり、肥料のやり方を工夫したりして林檎の木はどんどん増えていきました。村人たちは自分で育てた林檎を食べて幸せに暮らしました。

兄の林檎はどうなったのでしょうか。弟の林檎の木が増えてから、一時期、売上は減りましたが、木を育てなくても林檎だけ食べたいと言うお客様の要望に応じて、販売を順調に伸ばしました。林檎ジュースなどの新商品も開発し、従業員も増やして本格的に林檎会社を始めました。しかし、

林檎の木の育て方やジュースの作り方は企業秘密として、相変わらず村人たちには教えてもらえませんでした。兄の会社では、林檎の木が大きくなりすぎて、変な虫が付くようになり、それが悩みの種になりました。

図3 スオープンソースと林檎の話

